

# 内村鑑三と3人の娘たち

矢田部 千佳子

YATABE, Chikako

## 目次

1. 無教会史における女性
2. 内村と女性たち
3. 浅田信子
4. 高橋津佐子
5. 内村路得子
6. 結び

### 1. 無教会史における女性

無教会キリスト教の活動は紙上と聖書集会の両輪で展開された。前者について言えば、内村鑑三<sup>(1)</sup>が創刊した雑誌『聖書之研究』の発行であり、第344号(1929年)の発行部数は4,500部であった<sup>(2)</sup>。聖書研究会会員や書店、また海外への発送を除いた定期購読者のうち、女性購読者は20.3パーセントを占めた<sup>(3)</sup>。彼女たちの中には投稿する者もいた<sup>(4)</sup>。後者について言えば、日曜日ごとの聖書講義であり、その会員は1921年には652人を数えた<sup>(5)</sup>。そのうちの32.2パーセント(210人)を女性が占めた<sup>(6)</sup>。日清・日露戦争の勝利から大正デモクラシーの時代へと変遷するこの時期には、女性運動が展開されていた<sup>(7)</sup>。無教会キリスト教の女性会員もまた、内村から「自由」や「独立」、「ホーム」や「ゼントルマン」という価値を学んだのである。

このように、無教会の紙上と聖書集会の両輪の活動には、女性の参加

者の痕跡が認められる。だが、これまでの無教会史研究においては、<sup>(8)</sup>男性信徒を主体とする物語が織りなされてきた。1983年にジョン・ハウズは、その点を次のように指摘している。

内村鑑三の弟子のほとんどは男性であった。内村もこのことを誇りとし、彼のキリスト教理解を特徴づけていた男性的性格の一つのしるしと考えていた。しかし、同時に彼の弟子の中には多くの女性もいた。彼女らについてはあまり知られていない。<sup>(9)</sup>

ここでハウズは、内村の弟子には女性たちも多く存在したことを認める一方、彼女たちが歴史研究の光に照らされていないことも認めている。

無教会内部で女性信徒の活動が記録されるのは、2、3例を除き、1991年から始まった「今井館ウィークデイの集い」の活動が、『女の視点で語る』<sup>(10)</sup>に記録・出版されるまで待たねばならない。同会は2018年を以て休会となったが、筆者は同会を、無教会史における男性中心のパラダイムにジェンダー視点をもたらした契機と捉えている。ウィークデイの集いは、女性たちが企画し、女性たちが自らを語る、無教会の女性運動であった。それは、無教会史記述におけるパラダイム転換の可能性をわれわれに提供してくれるのである。そしてまた、無教会を日本キリスト教史の新たな文脈に位置付けることを可能にするだろう。本稿は、フェミニスト神学やジェンダー研究の成果を踏まえて、無教会史の創立期を書き直す試みの一端である。

## 2. 内村と女性たち

本稿で取り上げるのは、浅田信子、高橋津佐子、内村路得子という3人の女性である。<sup>(12)</sup>3者に関してはいずれも内村が40-50歳頃（1900年-1910年頃）の時の深いかかわりが記録に残されている。彼女たちは内村から何を学んだのだろうか。内村の女性指導にはいかなる特徴があるのだろうか。

その頃内村は、最後の妻となる静子との間に次女路得子と長男祐之をもうけて、ようやく自分の家族を築きつつあった。<sup>(13)</sup>『万朝報』の花形記者であり、社会運動にも積極的に参加し、『聖書之研究』(1900年発刊)をも軌道に乗せていた。また、日露戦争を前にして非戦思想を固め、伝道活動に専心し、キリスト教平和を唱道した信仰的成熟期にも当たる。一方で、前述したように、日本の社会は、女性たちの社会参加の意識が変化して行く時代を迎えていた。この時期の内村と3人の若い女性たちとの交流の考察は、内村の女性観を明らかにするだろう。

内村は、米国留学から帰るとすぐ、西部女性矯風会で「ホーム」という価値を唱道している。<sup>(14)</sup>これは、米国宣教師たちが形成していた、「クリスチャン・ホーム」を踏まえながら、それを批判的に発展させたものである。宣教師たちの使命は、日本人牧師養成だけでなく、彼らに見合う配偶者の育成でもあった。<sup>(15)</sup>一方、内村の「ホーム」は、何よりも生活と家族が存在する場としての故郷を意味していた。「ホーム」を司るのは女王であり、彼女は「ホーム」の秩序正しさ、清潔さ、儉約、子供の教育、そして、正しい言葉遣いを差配する。<sup>(16)</sup>内村は「ホーム」を通して、信仰を受容するうえで最も重要な個人の「自由・独立」の精神を育てることができると考えていた。その「ホーム」において「女王」に位置付けられている彼女たちの上には、実は、「男」が座していた。

男女同権は西洋思想の誤である、男尊女卑は東洋思想の誤である、女の首は男であり男の首はキリストであると、かく云ふて東西両洋の思想を超越して神の黙示に達したのである、婦は夫に其自由を引き渡して却つて之を全うする、夫は妻より自由を引き渡されて之を「キリストの僕」として聖く用ふる、しかし是れ決して男女同権ではない。<sup>(17)</sup>

ここでは、「男尊女卑」は否定されているが、「婦は夫に其自由を引き渡して却つて之を全うする」ことが奨励され、「男女同権」も否定されて

いる。男と結婚した女はその男と一体にはなるが、彼女にとって、内村が自身の墓碑銘にしたヒエラルキーの中では、筆者の言葉で言うなれば、“I for Man” が先に来ることとなる<sup>(18)</sup>。内村は男たちには「ゼントルマン」たれ、「己の自由をキリストに献げよ」と厳格な倫理<sup>(19)</sup>を説く一方で、女たちに対しては「淑徳と忍耐性」<sup>(20)</sup>が肝要であるとの見解を固持し、女性の社会的活動の意義を積極的に認めることはない<sup>(21)</sup>。

このような価値観を固持する内村と、かの3人の女性たちは、どのような交流を持ったのか。双方の間に価値観の齟齬はなかったのか。内村は彼女たちに何を教えようとし、それを彼女たちはどのように受け止めたのか。これらの問いに対して、以下で、内村書簡を主資料として考察する。

### 3. 浅田信子

信子は内村と最初の妻竹との間の子である。内村が渡米中の1885年4月15日に、結婚後7カ月で内村家を去った竹が身を寄せていた伯父浅田信芳方で、彼女は誕生した。内村に復縁の意志はなかったが、竹は信子の写真を送るなどしていた。米国で誕生を聞いた内村は、信子を渡すよう要求した<sup>(22)</sup>。信子は4歳の時、母とも別れ、祖母と伯父夫妻の下で育てられていたが、戸籍は内村のままだった。結婚可能な16歳になると、信子は正式に信芳の養女として移籍された<sup>(23)</sup>。内村と信子との初対面は、1902年春のことであった（同年11月13日付書簡による<sup>(24)</sup>）。同春、信子は女学校を卒業し、「父訓」と題された以下の五カ条を送られた。

#### 父訓

- 一、虚言は其最小の者なりと雖も大罪悪なることを忘るべからず。
- 二、世に最も貴きものは学問にあらず、道徳なり、徳のために為ざる学問は害あるも益なき者なり。
- 三、我儘を謹めよ、我儘は多くの婦人を滅せり、汝其亡す処となる勿れ。

四、汝の実父の理想的婦人は夫の車の後押を為す車夫の妻なることを記憶せよ。

五、汝の実父の為せし事と今為しつゝあることを了解するまでは汝の心を安ずる勿れ。

明治卅五年五月五日 別に臨んで

鑑 三

信 女 <sup>(25)</sup> へ

ここでは、「虚言」、「我儘」、また「徳のために為ざる学問」が戒められ、反対に、「道徳」、「夫の車の後押」しが奨励されている。第四カ条には、「女の首は男」という内村の原則が反映されているように見える。第五カ条からは、自らの理解者たるよう、信子に期待していることが読み取れる。この頃彼は、好戦的な世論とは反対の「非戦平和」へと自分の信仰を固めつつあったばかりでなく、およそ10年前のいわゆる「不敬事件<sup>(26)</sup>」という重荷を背負っていただ。

内村にとって「道徳」は最優先事項であったようである。信子とその後内村に数回出した手紙<sup>(27)</sup>への返信の中で、「人生に最も大切なる者は宗教と道徳」で、信子が聖書を読んで、身勝手を謹み、養父と相談するようにと諭している。では、内村の説く「道徳」とは何であったのだろうか。前掲の「父訓」第一カ条から第四カ条までが「道徳」の内容に当たるように見えるが、そこから読み取れることは、女性が男性とのかかわりにおいて、自らを中心、あるいは優位に置いてはならない、ということである。そのためには、学問も制限されている<sup>(28)</sup>のだ。

11月13日付の手紙には、信子の便りへの謝辞を記した上で、内村は以下のように書く。

余は汝の知らざる間に十八年間汝のために祈りたり、然るに今春汝と始めて会せし時に汝が全く世俗的の婦人にして少しも余の志を解せざりしを見て余は消入る計りに失望せり、余は其時思へり、汝は

余の実子にあらざるべしと、然れども恵ある神は余の十数年の祈祷を捨て給はずして終に聖霊を汝の心に下して汝を救ひ玉ひしが如し、斯くてこそ汝は始めて余の実子たるの資格を得しなり<sup>(30)</sup>

ここで言う「世俗的の婦人」とは信子の何を指したものか。内村の目に映った彼女の「道徳」的ではない振る舞いを指したものかもしれない。内村は後年聖書集會に出席した女性たちに服装が華美だと窘めることがあった。信子はこの後『聖書之研究』76号（1906年）に投稿し、「外面の裝飾は自らを喜ばせんためのものなり、故に奢侈、傲慢、嫉妬なる悪魔は此機に乗じて我内に侵入して吾人を擒にせんと企つ」（55頁）と書いている。「自らを喜ばせ」とは、内村が「父訓」で「我儘」として戒めていることだ。したがって、「世俗的の婦人」という評価は、服飾にかかわることだった可能性がある。

信子の長男日永康によれば、信子はそれから度々内村家に入出入りするようになった。<sup>(32)</sup>3年後の1905年11月10日に、内村が信子に宛てた手紙は以下の通りである。

静への書面毎度通読し、汝が真の信仰に入りつゝあるを知り、余の二十年来の祈祷が終に聴かれしを思ひ感謝に溢れ申候、(略)余は幾たびか子として汝を失ひしを悲みたり、然かし今やキリストに在りて余が生みし霊の子として汝を発見するに方て余は新たに汝を生しやうに感ずるなり、(略)余は日夜特に汝のために祈りつゝあり、余は汝のために何事をも為さざりしも二十年間余の祈りを続けし者は独り汝に就てあるのみ、汝は汝に与へられし祈祷に於ては最も富む者なりと信ず。

(略)彼女は真に汝を愛するなり、実に奇異のことなり、余は斯かる継母と継子を持つことに就て世に向て誇るなり。<sup>(33)</sup>

3年前の手紙と比較すると明らかに温かさが増し情感もこもっている。

この間に父子がより深く知り合ったことが想像される。しかし、その仲介者として、妻静子の存在があるのだが、そのことは指摘するにとどめたい<sup>(34)</sup>。

こうしているうちに信子の復籍問題が起こる。日永によれば、信子は自身のアイデンティティを内村に感じるようになった<sup>(35)</sup>。実父内村、養父信芳、そして仲介者宮前右太郎の間で2年半余続けられたやり取り<sup>(36)</sup>を読めば、内村が筋論を通しつつ、3者の、とりわけ信芳の、プライドを損なわないように配慮していることが分かる。結局信子は養父の許に残ったが、それは内村の信子への「霊の子」としての確たる信頼が土台になっていた。群馬県神川村万場に戻って教員になった信子は30歳<sup>(37)</sup>で同僚の日永初太郎と結婚した。初太郎は『聖書之研究』購読者で桐生聖書集会を主宰していたが、信子もその集会を支えた。内村は死のおよそ半年前、初太郎の伝道事業のために阡円の遺産を遺す約束をしている。父を送った後およそ30年経って、75歳になった信子は「祈の生活」という短文の中で、以下のように綴っている<sup>(39)</sup>。

私は自らの体験を通して、祈の力というものを、人一倍強く信じるものであります。それは私自身が、生来の世俗的な人間から、今日の新しい人間として誕生することが出来たのは、父内村鑑三が、私の知らない間一八年間、毎日私のために祈っていてくれたおかげであつたのであります<sup>(40)</sup>。

この文言は内村との初対面後受領した、父の書簡の内容と一致する。58年もの間、彼女は内村のその言葉を抱懐し、父の「祈の力」を通して「新しい人間」になったと言う。信子は、無教会キリスト者の生涯を全うした。

#### 4. 高橋津佐子

陸中花巻、北上河の畔に彼女の骨を埋めし故高橋ツサ子の霊に告ぐ。  
汝、余と主義を共にし、之を実行せんと欲して苦闘以て汝の短かき  
一生を終はれり、余は汝を憶ふ切なり、茲に此書を汝に寄せ、汝に  
代て汝の志を天下に述べんと欲す、汝、願くは余の此小なる贈物を  
受け、復た逢ふ日まで汝の心を安んぜよ。

鑑三<sup>(41)</sup>

この一文は1912年7月に出版された内村の短文集『独立短言』の中  
扉に掲げられた高橋津佐子への献辞である。津佐子は16歳から内村と  
の格別な関係に生き、27歳<sup>(42)</sup>の若さでこの世を去った花巻の名も知られ  
ぬ娘である。津佐子については、ジョン・ハウズや山本泰次郎、鈴木範  
久他がページを割いて、造り酒屋<sup>(43)</sup>の跡取り娘である「家出少女」として  
取り上げている<sup>(44)</sup>。中でも注目すべきことに、柴田真希都は、内村の津佐  
子への追悼文を取り上げ、以下のように、内村が津佐子を「偉人」とし  
て顕彰している、と解釈をしている。

内村が名も知られぬ個人の、しかも社会的には弱小者でしかない、  
地方出身の独身の若い女の身の上にかに大きな「偉人」の精神を  
見届けていたのが表明されている。内村が、当時にあつては社会的  
弱者の極みのような人物を取り上げて、「日本人」一般の価値観、  
あるいは「日本」社会全体の集合に対比するかのようにな彼女を際立  
たせて顕彰していること、そこに時代と文化への強い批判精神の発  
露を認めることができよう<sup>(45)</sup>。

内村が信子に「道徳」を教えようとしたとすると、津佐子の場合、彼  
女自身が「道徳」の追求者だったと言える。したがって、彼女が「余と  
主義を共にし、之を実行せんと欲して苦闘」していたことで、柴田の言



う「時代と文化への強い批判精神」を、内村と共に養った「道徳」の同労者であったと言うこともできる。

津佐子は、実父が早死にしたため、家督相続人となったが、母きゑの不道徳な行状によって、家庭は飲酒と姦淫の乱れた状態になった。<sup>(46)</sup>それを浄化しようとひとり立ち上がった。そこに居合わせたのが、『聖書之研究』購読者で、内村の信奉者の照井真乳臣<sup>(47)</sup>と斎藤宗次郎であった。2人は津佐子が入学した高等小学校の教員をしていたのである。<sup>(48)</sup>彼女は2人から聖書と内村の著作を習い、照井から内村の言葉「正義は最後の勝利者なり」<sup>(49)</sup>を教えられて感激し、1900年7月に、角筈の内村にひとり徒歩で会いに行こうと企てたのだ。この試みは、北上辺りで警察に保護されて蹉跎した。しかし、津佐子は学ぶほどに内村に会ってみたい思いが募り、再度角筈行きを決行する。今度は斎藤の紹介状を携えて列車に乗り、1902年10月31日遂に内村と対面できたのである。しかし、内村は話だけを聞いて、一晩泊めて帰すと伝える電報を斎藤に打った。別に手紙も書き、この件に関する以下の考えを説明している。それは、①家出人はかくまわれないというのが内村家のルールということ、②津佐子は未成年であって、親の承諾がない以上、内村がどれほど同情しても、帰すのが正義ということ、<sup>(50)</sup>である。そして、その津佐子を送り帰す根拠として「フィレモンへの手紙」と「ルカによる福音書」8章38-9節を示している。<sup>(51)</sup>

遠隔地に住む年頃の娘の振る舞いとして、津佐子の家出を無謀と批判するのは真っ当であろう。しかし、それは珍しいこととは言えなかった。政池仁は、「彼の教えを受けようと、いなかから上京して来た青年男女はひきも切らずあった」<sup>(52)</sup>と記す。内村は面会日を決めて、直接話を聞いていた。<sup>(53)</sup>他の訪問者たちとは違って、津佐子はむしろ冷遇されたという印象はぬぐえない。その原因は、彼女に家という無形の支配が大きいのかかっていたところにある。家督相続人である津佐子に家族の了解がない以上、彼女を留め置くことは拉致と同じことになる。内村はこうした事情を見て取っていたと思われる。<sup>(54)</sup>

しかし、その2週間後、内村は『万朝報』の同僚山県五十雄方での奉公口の手はずを整えて斎藤方に身を寄せていた津佐子を改めて上京させる配慮を見せた。ところが、これを知ったきゑは、今度は『万朝報』に「家出人捜索」の広告を出した。斎藤との連絡が万全ではなかったため、この間に親の許可を取ったものと思っていた内村は驚き、怒り悲しみつつも、再び津佐子を帰したのである。<sup>(55)</sup> 帰すまでの間、津佐子の話を聞いた内村は、後に、「彼女が通常の女でないことは私も十分認めます」と斎藤に記しており、津佐子を取り巻く環境が尋常でないことのみならず、津佐子自身が奇特であることをも見抜いている。

津佐子の闘いの背景には、日本社会にはびこる乱れた倫理道德と、家族制という問題、そして、キリスト教に対する偏見と嫌悪があった<sup>(57)</sup>と言えよう。このことを、ハウズは「キリスト教倫理に啓発された一日本人女性が、その倫理を自分の生活環境の中で懸命に生かそうとした例」と記している。とまれ、翌1903年2月に、内村が「高橋家に顕はれたる神の摂理驚くより外無<sup>(59)</sup>之候」と記す変化が高橋家に訪れた。<sup>(60)</sup>

この後、内村には、津佐子との文通や、照井と斎藤からの報告が続いた。ハウズは、「1902年から10年間の手紙の中で、ツサ子に言及している箇所は60以上あり、内村が彼女の問題にどれほど心を砕いていたかがわかる」と指摘する。それは津佐子に送った以下の書簡にも明らかである。

余は深き同情を卿<sup>おんみ</sup>に表す、卿は知らざるべけれども余も卿の如き試練に遭ひつゝあり、(略) 困む者は福ひなり、困まざればキリストの心を知る能はず、(略) 忍べよ、キリストに於て忍べよ、忍んで神の恩恵の大なるを知れよ、<sup>(62)</sup>

ここで、内村は忍耐と、キリストにある恵みの希望とを教えている。しかしまた、以下のような書簡もある。

拝啓、斯かる御質問を以て多忙なる小生を御困めなきやう願上候、  
小生は其御疑問が婦人たる御身に何の関係あるか解し兼ね候、彼得  
前三章四節を御一読願上候、勿々<sup>(63)</sup>

そして、斎藤にも、以下のように書き送っている。

先日ツサ子より又々何にかツマラナキ事申来り候、彼女は更らに単  
純になるの必要有之候ことゝ存候、小生は女子は理屈ばらぬのを好  
み候、彼女の御誘導何分願上候<sup>(64)</sup>

このように、内村を何度か質問攻めをしているような津佐子に対して、それは、女が発すべき質問ではないと言い、「ペトロの手紙一」3章4節を読むようにと言うのである。この聖書箇所は、女は柔和でしとやかな内面を磨くことが女性として価値あることだ、という婦徳の教えである。津佐子がどのようなことを内村に書き送っていたのか知ることができないのは残念なことだ。しかし、「婦人たる御身に何の関係あるか解し兼ね候」や、理屈が続けば「小生は女子は理屈ばらぬのを好み候」などというジェンダーにかかわる発言が出ているのは、内村が今で言う「ミソジニー」的な要素を内面に抱えていたからだと考えることができる。

それでも、内村は静子と共に津佐子を気遣っていた<sup>(65)</sup>。1906年秋に、内村家に下女の口ができた<sup>(66)</sup>。内村は委細にわたる労働条件を書き送り<sup>(67)</sup>、きふの了解も得たうえで、10月22日から一年有半働くこととなった。彼女は勤勉だったが、暫くは「正義の固り<sup>(68)</sup>」のような強張った態度で誰にもなつかず、内村を心配させた。それは、津佐子が、「多くの者の如く全く小生の宗教と性質とを誤解し居り、厳格なるをのみ神の道と解<sup>(70)</sup>し」ていたためだ。しかし、次第に変わって行き、内村をして「讚美歌を口ずさびながら余の家の厨房に働らいた、気品卑しからず厳肅なる彼女は下女としては余りに貴くあつた<sup>(71)</sup>」、と言わせるほどに内村のみならず家族からの信頼も得た。一旦帰郷するが、翌1908年末に改めて「家

族の一人として暫時もてなさん<sup>(72)</sup>」と招かれる。3カ月家族同様に過ごした津佐子は、ほどなく小学校の教員になるべく九段の裁縫学校に入学するが、脚気による心臓病のため1911年6月19日花巻に戻って行った。そして、同年11月30日にその激しく短い生涯を閉じたのである。

内村は、家出した津佐子と邂逅した1年ほど前に「フィレモンへの手紙」の講解を行なっている<sup>(73)</sup>。パウロがフィレモンの奴隷だったオネシモを、「彼は我が心なり、我が五臓に均しき者なり」と呼んでいることを喚起し、「奇異なる友誼、基督を信ぜざる者の推量し能はざる所」と2人の中にはキリストを通して初めて成り立つ友情があると教えている<sup>(74)</sup>。期せずして本講解の記憶が新しい時に、逃亡奴隷オネシモとも思しい家出娘津佐子が目の前に現れたのだ。内村は送り帰した津佐子にこの聖書箇所を書いたメモを持たせ、斎藤に彼女が自分にとってオネシモと同じだと伝えようとしたと推察しても、あながち間違っていないだろう。「彼は我が心なり」というに似た同情は、10年余の交流の間内村に通底していた。

家族として過ごした後、内村は、帰郷する津佐子に「友誼的忠告」<sup>(75)</sup>を与えた。それには、①戸主としての権威を認識して、全責任を負う覚悟をすること、②徹底的に財産を管理し、出納を監視し、実印を誰にも渡さないこと、③誰かに相談はしても決断は自分で下すこと、など極めて実効的な家督相続人の在り方を丁寧に教えている。これは、彼女の後ろ盾になる男性を探すように言うのではなく、女であっても独立した戸主として立つ権利があることを尊ぶ態度と言えよう。柴田は、内村が津佐子に「個人における人類的・普遍的諸価値の抱懐」<sup>(76)</sup>を見ていたと記す。しかし、内村は、津佐子が家を出て新たな人生を歩むことよりは、家にとどまって家そのものを清めることが大事だという考えを持っていた<sup>(77)</sup>。ハウズは、このことを「彼の寄せた関心にもかかわらず、内村は解決策を与えることはできなかった」と評し、その理由を内村が日本の伝統的な家の倫理は尊重されなければならないと考えたからだ<sup>(78)</sup>と指摘する。一方、柴田は、内村が津佐子という女性の困難を「今日の日本に」<sup>(79)</sup>あるも

のと見出し、彼女の価値を「100年後の思想的に進歩した日本につながっている」こと<sup>(80)</sup>に着眼する。

とまれ、このはたから見れば「奇異なる友誼」を津佐子の方も確信していた。彼女は臨終前に「おらが死ねば先生はキット東京から来る」という信頼の言葉<sup>(81)</sup>を遺した。そして、内村は愛娘路得子の重篤な病床を離れて、津佐子の葬儀に参列すべく花巻に向かったのである。

## 5. 内村路得子

路得子は1894年3月12日に、静子との間に生まれた長子で、内村にとっては次女である。内村が不敬事件の困難や貧困から回復する前に京都で誕生したため、「メリンスの着物一枚買ってやることができなかつた」<sup>(83)</sup>。静子が懐妊した頃、内村は『貞操美談 路得記』を上梓したところで、それに因んで命名した<sup>(84)</sup>。娘の誕生を知らせるアメリカの友人ベルへの書簡には、「我が子を持たぬうちは、神の愛を解し得ない」<sup>(86)</sup>と父になった喜びを吐露している。また次便には、彼女から絶えず靈感を得て、「われわれも必要のある時には、ただ泣きつつ神にすがるべきで<sup>(87)</sup>」と書いていることから、内村が路得子の成長を通して、神の愛や信頼について学んで行ったと言うことはできるだろう。

しかし、路得子は結核と見られるが特定できない病のため18歳10カ月で死ぬ。彼女の死は、内村の信仰に決定的な転機をもたらした。病の苦しみの中にあつた路得子が死に際に発した言葉「モー往きます」によって内村は、地上から天上へのつながりを確信し、やがて再臨運動へと進むのである。ゾンターク・ミラは、路得子の死は「衝撃的な出来事であったが、彼はこれを通して新たな目で世を見るようにもなり、新たな希望も湧いてきた」<sup>(90)</sup>と記す。

路得子がどのような娘であつたのか、内村とどのような関係にあつたのかを記す資料は極めて少ない。内村の追悼文「ルツ子の性格」<sup>(91)</sup>によると、路得子は外見も内面も父に似ていて、好き嫌いの激しい娘だが、「不遇」の友の傍らに立つような娘であつた。学齢前に確たるキリスト教信

者の認識を持っていた。当時は「耶蘇教」信者であるというだけでいじめに遭ったが動じることはなかった。<sup>(92)</sup>「恐い物知らずの女であり」、「単独を愛し」、「独り静肅を守る」<sup>(93)</sup>のを好んだ芯の強い、内村の独立の精神を受けついで子供だったようである。<sup>(94)</sup>

路得子にとって、父はしばしば伝道で地方に出かけ、それ以外はほとんど家にいるが、仕事場にこもって原稿を書いていた。来客は引きも切らずあり、若い門弟や使用人たちが家の中に常にいたため、父との直接的なふれあいの時間より、多数の人びとの中で父を見る時間の方が多かったであろう。それゆえ路得子は父の姿を見ながら、その信仰を真つすぐ受け取ったと言えるかもしれない。内村は、以下のように、彼女にとって両親は「権能」であったと記す。

父母の命とあれば彼女は浪の風に従ふが如くに服従しました、肉体の事に就ては母の命、靈魂の事に就ては父の命、彼女に取りては是れ以上のオーソリチーはありませんでした、(略) ルツ子の心の天地には彼女の父と母とより以上の者は無かつたのであります、此母の下に此父の業を扶けんこと、是れが彼女の生涯の唯一の目的であつたのであります。<sup>(95)</sup>

最後の文において、内村が信子に与えた「父訓」の中の、女が夫の車を後ろから押すことを徳目とする一カ条が想起される。さらに、内村は、路得子の「生涯の唯一の目的」が夫を助ける母を支えることであったと言うのである。しかし、彼女は東洋流の二十四孝的な孝子ではなかった、とも言い、「其点に於ては彼女に多くの欠点がありました」と内村は<sup>(96)</sup>記す。両親に「権能」を認めながら、どこか自由に振る舞おうとする路得子の姿が見られよう。

彼女が14歳の時に書いた「友人の死を傷むの文」を内村は『聖書之研究』145号(1912年)、47-50頁に発表した。その中で、路得子が病に倒れた優秀な無二の友を見舞い、その後すぐに彼女の亡くなった悲し

みを、「私が代ってあげたかったわ」(49頁)と書いているのは、ここに、内村がキリスト教の価値とする「犠牲の精神」の発露を読み取ることができる。もう一篇同誌149号(1912年)、52-53頁に掲載された彼女の日記(「ルツ子のクリスマス」)の一節は、娘らしいクリスマスの祝会の歓びを綴ったものである。家族からのプレゼントと祝会のご馳走や福引に歓喜する一方で、同時に恵まれない子供に思いを馳せる様が生き生きと描写されている。ここに、彼女が福音信仰を受けながらのびのび育った姿を彷彿とさせるものがある。また、内村は愛猫タマをめぐって彼女が「タマ狂」と呼ばれた逸話をユーモアを交えて追悼文に残している<sup>(97)</sup>。

路得子は、1911年3月に実践女学校を卒業した後すぐに、月給3円で「聖書之研究社」事務員になった。しかし、僅か2カ月で原因不明の発熱に苦しみ、翌年正月にこの世を去るまで7カ月の闘病をした。そして、内村は、「ルツ子の信仰的生涯は彼女の臥床を以て始まりました、此時までの彼女は純粹なる内村家の女でありました、然し此時よりして彼女は漸々と天国の民となりました」と、路得子が信仰者としてその生涯を終えたことを報告している<sup>(98)</sup>。この叙述は、彼女が、内村から強く勧められてというより、自発的に信仰を得て行ったように記されている。これは、祐之が「何かにつけて干渉がましく圧制的だった父の、このことに対する態度は存外に自由だったのである。私は鑑三から、かつて一回も信仰不足をたしなめられたことはなく、また自分の事業を継げと強制されたこともなかった<sup>(99)</sup>」と書いていることに通ずる。

路得子の旅立ちは津佐子の死から僅か43日後のことであった。津佐子の永眠を告げられないまま、自身も病床にあった路得子は、その年のクリスマスに、「ツサさんは可愛想だ、何にか買って送つてやりたい」と、母にせがんだという<sup>(100)</sup>。

内村は、翌年発行した単行本『所感十年』への献辞で、この本が路得子の「感化の下に筆せられし<sup>(101)</sup>」文字だと書く。内村にとって、彼女の死は格別な経験であったが、路得子の生そのものが信仰の糧とされて来たように思われる。そして、信仰者として愛娘が天へと渡って行ったこと

を確信した内村が、告別式の挨拶で発した言葉は参列者を驚かせた。

路得子は嫁入のころに達しました。地上に置けば嫁入の心配をしな  
ければならなかったのであります。然しイエス様は天国に花嫁とし  
てお召し下すったのであります、今日は路得子の葬式ではなく結婚  
式であります。<sup>(102)</sup>

さらに、門弟たちを最も恐れさせたのは彼女の埋葬にあたって内村が  
「ルツ子さん万歳！」と天に向かって叫んだことであつたといふ<sup>(103)</sup>。その  
日、内村は、「余は余に残りしすべての野心をルツ子の亡軀と共に彼女  
の墓に葬つた」と、喪失の大きさが窺える心情を吐露している。そして、  
これを「余は今意志的には水母の如きものとなつた」とも表現する。  
それでも、これからは「真実に神の聖旨に叶ふ事業が出るのであると思  
ふ」と自身の心境の変化を述べている。<sup>(104)</sup>

内村が同年4月千葉県一の宮町の婦人会で講演して「世に家庭程美は  
しいものはありませぬ（略）、家庭とは『天国の出張所』とでも申した  
らよかろう」と語っているように、路得子の死を通して「家庭（ホーム）」  
は「天国と愛を以て結び付いて居る処」と内村には理解されたのである。<sup>(105)</sup>  
路得子はこうして、内村をしっかりと天国につなぐ者となつたのである。

## 6. 結び

内村と信子、津佐子、路得子の3人の娘たちとの交わりを考察したが、  
彼女たちが内村から習ったことは、信子は祈り、津佐子は愛と友情、そ  
して、路得子は信頼と救いであつた。また彼女たちからも、それらを内  
村に齎したと言つていい。ここに全く境遇の違う3人の共通項があると  
すれば、それは3者ともが内村の執筆した『聖書之研究』を「読んで」  
いたこと、そして、幾ばくか「書く」女たちでもあつたことである。<sup>(106)</sup>『聖  
書之研究』に3篇の投稿が掲載されている信子の文章を読むと、76号  
や81号とは異なつて、89号の自己表現の仕方は、「余」から「我」へと、



また「私」へと明らかに変わっている。その背景には、復籍問題をめぐる内村との対話の中で、信仰の質が変化したことだけではなく、独立心を養うこともできたことがある。最終的には、『聖書之研究』89号(1907年)に掲載された以下の文章において、同誌を友として信仰の質を変化させ、独り立つ女性の姿を窺い知ることができるのである。

私は山間の寒村に在ってこゝに一人の語るべき友、一人の聞くべき師をもちません。然し、私は人ならぬ四人の友また師を持ちます、それは神と天然と聖書と研究誌とであります。(46-47頁)

内村は、女に学問は要らないと言いながら、学校では教えない「自由・独立」の道を『聖書之研究』の基調論文の中で繰り返し示している。

シヨシャナ・フェルマンは、女たちも一旦教育を受けてしまえば、知らぬうちに「男性的知性 (the male mind)」にとらわれた考え方をするようになる、と指摘するが、<sup>(107)</sup>『聖書之研究』の女性読者たちも、無意識のうちに内村の「男性的知性」をベースとする思考をし、「自由・独立」に生きようとしたとしても不思議はない。女は結婚して男と一体になり、夫にしたがって生きるのを旨とすると唱えた内村自身が、この紙の媒体に包含されていた矛盾に気づいていたか疑わしい。しかし実際、信子は30歳まで結婚しなかったし、津佐子は内村の教えた倫理道徳に見合う男を見つけることができなかった。路得子も、後の内村の述懐によれば、健康だったとしても父ゆえに結婚には困難を抱えていた。<sup>(108)</sup>

内村の女性観と同時代の他の代表的キリスト教指導者たちのそれとを比較すれば、興味深いことに、植村正久は「女性の恩人」<sup>(109)</sup>と称され、海老名弾正は主イエス・キリストの女性性や性的マイノリティに言及する記述を遺している。<sup>(110)</sup>また、「女子とても確乎として独立した個性、即ちたゞ一人でも世を渡ると云ふ考えが真に必要であります」と説くのは、<sup>(111)</sup>内村の親友の新渡戸稲造である。こうした身近なキリスト者たちの女性観を内村も知っていたはずであるが、先述した通り、彼の聖書解釈は、

男女同権を否定するものが大勢を占める。

最近の研究で、内村の女性観を彼の福音書釈義から探ろうとしたのは、フェミニスト神学者の絹川久子である。絹川は、1901年から1929年までの『聖書之研究』に掲載された28篇の釈義を精査したうえで、内村を「福音の自由に生き抜こうと激しく闘った」者として評価しつつ、「内村の釈義を通して検証される女性観は、人間としての平等意識に支えられている」とは言い難い<sup>(112)</sup>という厳しい結論に達している。

また、祐之の妻美代子は、内村亡き後、著作の編纂に携わったが、興味深い逸話を2つ遺している。それは、祐之がドイツ留学へと出発する前夜、父鑑三に呼ばれて「留守の間の美代子の処置は父上に一任する」と委任状を書かされたというものだ。美代子はあくまで夫の祐之に属する者であった。したがって、夫が不在の間は、所属が家長である鑑三に移るのだ。しかし、美代子は、「私としては心外なことである<sup>(114)</sup>」と記している。もう1つの逸話は、視力の弱ってきた鑑三が「校正（後世）恐るべし」と口ぐせに言っていたのだが、自分に声を掛けてくれなかったというものである。これに対して、美代子は、「祐之が、自分の本職以外のことは全部私に任せて、徹底的に私を利用したのに反し、明治以前生まれの父は、やはり女性の能力をそれほどには信用していなかったのであろう<sup>(115)</sup>」と嘆息する。

「明治以前」生まれの内村の感性に、ジェンダー研究で言うところの「ミソジニー」の要素を見つけることは容易いだろう。しかし、注目すべきことは内村自身乗り越えられない背景の限界と矛盾を抱えていたことである。1921年の『羅馬書』講義第五十八講の中で、内村は、パウロが記した人名録において、女性名が3分の1を占めていることを取り上げている。すなわち、初代教会には優秀で福音のために努力した女性が多かった点に着目し、男尊女卑が著しかったギリシャ・ローマ時代において、福音は、新たに婦人の価値を発揚した点で、またその地位を高めた点で、「全く独始的」であった、と説いている。そして、彼は、「コリントの信徒への手紙一」11章11節<sup>(117)</sup>について、パウロの一種の（男女）

平等観を述べたものであると言い、「福音はパウロさえも革命的にした<sup>(118)</sup>」という見解を披露する。内村は、聖書と格闘するうちに、福音が女性の働きを促し、必然的に社会的地位を高めているということを認めるまでに、画期的に理解を深めているのだ。

既にキリストの在世中にも幾人かの婦人が弟子の中にありて、それぐ重き役目に当り或意味に於て男子にまさりしこと四福音書に記さるゝ通りである。そして茲に記さるゝ通り、使徒時代に於ても亦婦人に多くの善き信者ありて、彼等は男子に劣らぬ良き働きをなしたのである。かくて婦人は基督教世界に於て事実的にその値を示してその地位を高め進んだのである。<sup>(119)</sup>

これは、単なる机上の解釈ではない。本稿で見てきた娘たちから内村は多くを学んだに相違ない。ハウズも、内村が津佐子の生き方から、「キリスト教に固有な人間の尊厳についての思想が、一人の女性に対し、日本の伝統的な社会が求めているものとはまったく違った社会的役割を遂行しようと信じさせる力があること」という日本社会における「自由・独立」の女性たちの前途に立ちはだかる課題を知ることができたと指摘する。ただし、同時に、「内村の同世代の何人もこの問題を解決し得なかった」とも指摘している。<sup>(120)</sup>そして、この内村の男女同権否定の言説は生き続け、彼の矛盾と共に後代へと引き継がれて行ったのである。

内村の女弟子たちは、「淑徳と忍耐性」を美德として聴く一方で、内村と共に、より自由で、より独立した人間の価値を学び続けて行ったと推測される。これまで記述されることがなかった彼女たちの物語は、これから場を探し出しながら、限られた資料の中でさえ多くを語ることで、内村の信仰をさらに可視化する一助となるであろう。そうした記述が、これまでの「無教会パラダイム」を転換して行くことになるのである。

## 注

- (1) 内村の著作の引用は、『内村鑑三全集』（全40巻）岩波書店、1980-84年、による。以降『全集』と表記。
- (2) 『全集』35巻、428頁。
- (3) 高木謙次「内村鑑三主筆『聖書之研究』購読者名簿」『内村鑑三研究』21（1984年4月）、112-136頁、による。なお、送付先は日本本土（沖繩と樺太を含む）の他、アメリカや中国、台湾、朝鮮に及んでいた。
- (4) 1909年頃までは、読者の投稿が定期的に掲載されていた。
- (5) 東京近郊の門弟たちを対象に開かれた。
- (6) 内村美代子『晩年の父内村鑑三』教文館、1985年、247頁。また、高木謙次「東京聖書研究会々員名簿」『内村鑑三研究』20（1983年10月）、109-114頁、によると、1917年には男子105人、女子25人、だったものが、再臨運動開始後の1920年には、男子420人、女子230人、翌1921年には男子444人、女子258人を数え、女子の割合は、35-36パーセントと急増している。
- (7) 阿部恒久・佐藤能丸『日本近現代女性史』芙蓉書房出版、2000年、51頁。
- (8) 『無教会史』（全4巻5冊、無教会史研究会編）新教出版社、1991-2002年、『無教会キリスト教信仰を生きた人びと』無教会史研究会編、新地書房、1984年、稲垣真美『内村鑑三の末裔たち』朝日新聞社、1976年、『内村鑑三の継承者たち』稲葉満・山下幸夫編、教文館、1995年、他。
- (9) ジャン・ハウズ「内村鑑三と高橋ツサ子」（田村光三訳）『内村鑑三全集月報』37（1983年10月）、3-7頁。以降『全集月報』と表記。
- (10) 「無教会」キリスト教の母体である今井館教友会が、女性たちによる女性たちの活動として始め、女性たちの働きや思想がクローズアップされることになった。
- (11) 『女の視点で語る』（1-28号、今井館聖書講堂女性の企画グループ編）今井館教友会、1991-2017年。
- (12) 津佐子の生年は確定的ではないが、内村の記述から逆算すると1887年になる。3人の内では年長だが、本文では、内村との人格的関係が発生した順番に並べた。また、内村の実子ではない津佐子を取り上げたのは、既述したように、同時期に、且つ、極めて個人的に接した3人と内村の

態度を比較検討するためである。因みに、内村は津佐子を養女にしようと考えたこともあると記している(『全集』19巻、21頁)。また、津佐子の場合、斎藤宗次郎という内村の弟子の存在が常に背後に見え隠れするが、内村は彼女を全く独立した個として対峙している。なお、本稿で取り上げた女性たちの名前は、これまでほとんどカタカナ表記がされていた。本稿では、ジェンダー研究という立場から、女性差別とも言える女性名のカタカナ表記を、引用部を除き、可能な限り漢字にした。女性名の漢字化は明治後期から見られるようになった(紀田順一郎『名前の日本史』文藝春秋、2002年、127頁)。

- (13) それまでの内村には、最初の妻との離婚や「不敬事件」によるバッシングや2番目の妻の死など、不幸が続いていた。
- (14) 『全集』1巻、411-18頁、『求安録』(『全集』2巻、134-249頁)。
- (15) 小檜山ルイ「近代日本におけるキリスト教と女性」『近代日本にとってのキリスト教の意義』日本キリスト教文化協会編、教文館、2019年、137-176頁。
- (16) 「ホーム」はまた、「平安を与ふる処」でもある(『全集』2巻、173頁)。
- (17) 「婚姻の意義」(『全集』25巻、598-601頁)、600頁。
- (18) 内村の墓碑銘は、“I for Japan, Japan for the World, The World for Christ, And All for God”である。
- (19) 内村は、売春問題や蓄妾制度に関して『万朝報』の英文記事で批判し、「私の墮落に喜びを得る人たち、私を玩具として弄ぶ人たち——まずその人たちに、無力な者に対する義務を教えてください」(『内村鑑三英文論説翻訳篇上』亀井俊介訳、岩波書店、1984年、215頁)と書き、買春する側への批判の目を持っていた。
- (20) 「To Be NO. 1」(『全集』31巻、262-263頁)、262頁。
- (21) 米国の婦人参政権運動家だったエリザベス・スタントンが、キリスト教を「女権伸長の大妨害物と見做」していることを批判している(『全集』2巻、263頁)。
- (22) 1885年6月16日付浅田信芳宛書簡に、「小児事ハ直ニ東京拙宅へ御引渡被下度願上候」とある(『全集』36巻、171頁)。なお、内村は、1888年5月に帰国した。

- (23) 日永康「浅田信の復籍問題」『全集月報』37（1983年10月）、7-9頁。
- (24) 『全集』36巻、535頁。中沢治樹編「『若き内村鑑三』補遺」『内村鑑三研究』8（1977年4月）、121-130頁、によれば、信子自身の話としても、父子の対面は女学校を卒業した春、内村家へ訪問した折、となっている。一方で、日永によると、内村は信子が高等女学校3年生の時に高崎の旅館で初めて父子の対面を果たして移籍について本人の意思を確かめたという（前掲論文）。なお、内村は信子への書簡を女学校宛に送っているが、それらは信子の卒業後のことで、謎が残る。日永は2019年に没したため、確認は不可能になった。本稿では、内村の書簡の日付にしたがって、論を進める。
- (25) 『全集』40巻、3頁。
- (26) 1891年、第一高等学校教員だった内村が教育勅語に最敬礼しなかったため批判を浴び、退職に追い込まれた。
- (27) それらの手紙は現存しないが、以下に述べるそれらに対する内村の返信（10月4日付）から明らかなのは、信子が内村に近づきたいとの願いを伝えていたということである。
- (28) 『全集』36巻、529頁。
- (29) 「父訓」は多分に、内村から見た信子の母竹の態度や破婚の経緯を背景にしたものと筆者は推察するが、竹については別稿で論ずる。
- (30) 『全集』36巻、535頁。
- (31) 内村が女性門弟の1人に「柏木の集会に来る時には、アナタの服装は成るべく質素にして下さい」と書いている（1924年5月19日付書簡、個人所有）。内村は後に「ハイカラ婦人」という言葉も使っている。
- (32) 日永、前掲論文。
- (33) 『全集』37巻、80頁。
- (34) この後、静子が父親の看病で京都に長期滞在することになった時、鑑三は静子の京都の滞在先の住所を信子に書き送っている。静と信子との文通が常態化していたことが窺える（『全集』38巻、268頁）。
- (35) 日永、前掲論文、7頁。
- (36) 『全集』36、37巻、書簡集を参照。
- (37) 復籍問題は、1906年11月から1909年6月まで続いた。1906年11月、

信子は再び『聖書之研究』81号に投稿していて、すでに確たる内村の贖罪信仰を告白している。

- (38) 日永によれば、信子は津田塾英語学校に一旦は入学したが、内村の反対で、養父母の住む群馬県神川村万場の神川東尋常高等小学校の代用教員になったという(前掲論文)。5年の後、無試験検定によって本科正教員の資格を得た。これは当時は異例のことだったと石原兵永は記している(石原兵永『忘れ得ぬ人々―内村鑑三をめぐって』キリスト教図書出版社、1982年、271頁)。
- (39) 『全集』39巻、453頁。
- (40) 『福音と生活』(『聖書の言』300号記念文集)、聖書の言社、1960年、157-8頁。
- (41) 『全集』19巻、177頁。
- (42) 津佐子の実年齢については、数え年と満年齢との誤差が感じられる記録もあるが、ここでは内村の追悼文「高橋ツサ子」(『全集』19巻、21-25頁)、21頁、によった。
- (43) 屋号を今酉といった。
- (44) ハウズ、前掲論文、3-7頁、山本泰次郎『内村鑑三 信仰・生涯・友情』東海大学出版会、1966年、179-196頁、鈴木範久『内村鑑三日録』(全11巻12冊)、教文館、1993-1999年、6巻、320-327頁。以降『日録』と表記。
- (45) 柴田真希都『明治知識人としての内村鑑三』みすず書房、2016年、103頁。
- (46) きゑが町の助役山田四郎を情夫として家の中に連れ込んでいた(山本泰次郎『内村鑑三とひとりの弟子』教文館、1981年、62頁)。
- (47) 照井は花巻集会を主宰し、『聖書之研究』常連の投稿者であった(42、50、83、90、94号)。
- (48) 津佐子は仙台の裁縫学校に通っていたが、家の浄化には学問が必要と考え、高等科に入った(山本1981年、62頁)。
- (49) 山本1966年、180頁。
- (50) これより僅か6年前に女性の成人年齢が20歳に引き上げられる法律が施行されたばかりであったし、財産法を含む明治民法は、激しい審議の末に1898年7月に施行されたばかりであった。津佐子が家督相続人だ

という「家」からは切り離せない立場を内村は軽視することはできなかった。

- (51) 『全集』36巻、534頁。手紙のオリジナルは、以下のICUデジタルアーカイブで見ることができる。[https://www-lib.icu.ac.jp/Uchimura/DigitalArchive/PDF/A\\_015\\_1.pdf](https://www-lib.icu.ac.jp/Uchimura/DigitalArchive/PDF/A_015_1.pdf) (2021年1月22日閲覧)
- (52) 政池仁『内村鑑三伝』(再増補改訂新版)教文館、1977年、475頁。政池は、津山市キリスト教図書館を私費で建設した森本慶三も家出して内村の弟子になったと記す。森本の思い出は、「内村先生に師事するに至った経緯」『日録』3巻、64頁以下、も参照。
- (53) 信州上田の成澤玲川も同じ頃「或る日上京して淀橋角筈のお住居へふらふらと行ってみた」と述懐している。彼は幸運にも内村と面会することができた。それは彼の人生を変えることになるが、帰宅して熱く語る弟の言葉に動かされて、後日姉のツネも内村に会いに出奔する事件が起きた。ツネはそのまま内村の家で働くことになったという(成澤玲川「内村鑑三先生の思い出」『回想の内村鑑三』鈴木俊郎編、岩波書店、1982年〔12版、初版1956年〕、256-270頁)。『聖書之研究』には「面会規則」として、希望者への注意事項が掲載された(『全集』10巻、461頁)。
- (54) 「余は能く其不完全を知ると雖も日本の旧き家庭は之を重んぜざるを得ない」と津佐子の追悼文に記している(『全集』19巻、21頁)。
- (55) 山本1981年、80頁。
- (56) 『全集』36巻、541頁。
- (57) ハウズは「ツサ子のフラストレーションは、キリスト教を真面目に受け入れた女性がどれほど大きな問題に直面しなければならないかを示している」と指摘する(ジョン・ハウズ『近代日本の預言者 内村鑑三、一八六一—一九三〇年』堤稔子訳、教文館、2015年、233頁)。また、津佐子の葬儀はキリスト教式と仏式の両方で行われた。「坊主に棺を横取りされるなどは実に醜態であった」と後に内村は語っている(斎藤宗次郎『恩師言』教文館、1986年、240頁)。
- (58) ハウズ、前掲論文、3-4頁。
- (59) 『全集』36巻、545頁。
- (60) 母きゑの愛人山田が急死した(山本1966年、83頁)。



- (61) ハウズ、前掲書、237頁。
- (62) 1904年1月13日付津佐子宛書簡(『全集』37巻、4頁)。
- (63) 同書、11頁。
- (64) 1904年9月29日付斎藤宛書簡(同書、31頁)。
- (65) 1906年5月5日付斎藤宛書簡(同書、113頁)。
- (66) 内村家では、来客が多いことや雑誌発行に静子が関わっていたことから、常に下女を雇っていた。教友会員自身や、その姉妹、縁者などが多かった。なお、「住み込みの家事使用人である女中の明治期での呼称は、『下女』『下婢』が一般的であった。それが、大正初めには次第に『女中』という呼称に置き換わっていくという経緯がある」(長野ひろ子『明治維新とジェンダー』明石書店、2016年、69頁)。
- (67) 朝4時から7時までの台所と針仕事。給金は2円、学ぶことは優先順位ではないと伝えている(1906年9月24日付斎藤宛書簡〔『全集』37巻、132-133頁〕、及び10月10日付斎藤宛書簡〔同書、139頁〕)。
- (68) 『全集』19巻、22頁。
- (69) 斎藤、前掲書、120頁。
- (70) 1907年2月12日付斎藤宛書簡(『全集』37巻、157頁)。
- (71) 『全集』19巻、22頁。
- (72) 1908年12月9日付斎藤宛書簡(『全集』37巻、264頁)。
- (73) 「基督教的書翰文の標本」(『全集』9巻、13-27頁)、22頁。
- (74) 同書、25頁。
- (75) 『全集』37巻、281頁。
- (76) 柴田、前掲書、105頁。
- (77) 内村は「ツサ子を救はんと欲すればドウしても今酉家を救はざるべからずと存候」と斎藤に書き送っている(『全集』37巻、278頁)。
- (78) ハウズ、前掲論文、6頁。ハウズは、「日本の伝統的な家の倫理は—内村はそれが旧約の倫理に近いとますます信じるようになっていた」と、記している。
- (79) 内村は津佐子追悼文において、この言葉を5回続けて使っている(『全集』19巻、23頁)。
- (80) 柴田、前掲書、105頁。

- (81) 山本 1966 年、182-183 頁。
- (82) 内村は「私供の此世の境遇が其絶下に達したる時」と記す（『全集』19 卷、33 頁）。
- (83) 内村祐之『鑑三・野球・精神医学』日本経済新聞社、1973 年、214 頁。  
ベルも路得子の誕生には喜び、祝い金を送った。内村はそれで着物を作り、路得子はそれを「ベルさんの着物」として、生涯大切にしていた（益本重雄・藤澤音吉『内村鑑三傳』獨立堂書房、1935 年、320 頁）。
- (84) 『全集』2 卷、256-8 頁。
- (85) 「内村にとり旧約に登場するルツは理想の女性であった」（鈴木『日録』3 卷、107 頁）。
- (86) 『全集』36 卷、400 頁（訳は山本 1966 年、380 頁）。
- (87) 『全集』36 卷、404 頁（訳は山本 1966 年、384 頁）。
- (88) 『全集』19 卷、65 頁。
- (89) 宮部金吾宛書簡に、「娘の死状誠に美しく、是れ死には無之、transition に有之候、靈魂不滅は殆んど demonstrated fact なりと存候、是れ creed には無之、fact に有之候」とある（『全集』37 卷、470 頁）。
- (90) ゾンターク・ミラ「大正期日本における合理主義と救済——1918～19 年のキリスト再臨待望運動の『厚い記述』」（東京大学大学院人文社会系研究科 2008 年度博士学位申請論文）、91 頁。鈴木範久も『日録』8 卷で同様の解釈をしている（267 頁）。
- (91) 『全集』19 卷、59-66 頁。
- (92) 「彼女の朋輩は幾度となく『ヤソ味噌、テッカ味噌』と云ひて彼女を虐めました」（同書、60 頁）。キリスト教に対する偏見については路得子の弟の祐之も同様の経験を記している（内村祐之、前掲書、39 頁）。
- (93) 『全集』19 卷、60 頁。
- (94) 益本・藤澤、前掲書には、「ルツ子さんの性格を言はうと思ふならば、内村の性格を子供のものに直したのものと思へばいゝであらう。世俗に慣はず、染まず、苦痛に耐えた乙女であったのだ」（319 頁）とある。
- (95) 『全集』19 卷、64 頁。
- (96) 同書、64 頁。
- (97) 同書、62 頁。

- (98) 同書、65頁。
- (99) 内村祐之、前掲書、96頁。
- (100) 『全集』37巻、463頁。
- (101) 『所感十年』(『全集』19巻、349頁)。
- (102) 益本・藤澤、前掲書、320頁。
- (103) 矢内原忠雄「先生の涙」『内村鑑三——追想集』鈴木俊郎編、淡路書房、1949年、110頁。
- (104) 「愛女の墓に葬る」(『全集』21巻、190-191頁)。この一文はすぐには発表されず、3年後の『聖書之研究』174(1915年)に掲載された。
- (105) 『全集』19巻、101頁。
- (106) 津佐子の書いたものは管見の限り残っていない。しかし、内村との頻繁な文通があったことがみとめられるし、「誌上の講談会実験録(第3回)」『聖書之研究』44(1903年)、59-64頁、62頁に掲載されている収録されなかった投稿者の中に、「麴製造、高橋津佐君」の名前がある。
- (107) ショシャナ・フェルマン『女が読むとき女が書くとき』下河辺美知子訳、勁草書房、1998年、24頁[Felman, S., *What Does A Woman Want?: Reading and Sexual Difference*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993, p. 13]。
- (108) 「今は無いからよいが、僕もルツの結婚問題に就いては大苦心であった。友人は先生の娘なりと容易に手を下さず、友人ならざる人は僕を恐れてもらわず、僕らもまた誰なりに嫁がせたくないと思うた」と語っている(斎藤、前掲書、210頁)。
- (109) 羽仁もと子による植村追悼の言葉として「先生は實に私たち女性の恩人でした」が紹介されている(『植村正久と其の時代』[全5巻6冊、佐波亘編]教文館、1937-1941年、5巻、599頁)。また、植村正久は、雑誌『福音新報』の他にYWCA機関誌『明治の女子』にも頻繁に寄稿していた。
- (110) 「我が女性観」『新人』5巻5号(1904年5月)、12頁。また、海老名弾正は、雑誌『新人』を発行していたが、その姉妹誌と銘打った『新女界』も出していた。
- (111) 「良妻賢母の新意義」『婦人画報』1911年2月1日号。

- (112) 絹川久子「内村鑑三の福音書釈義に見られる女性観」『内村鑑三研究』43 (2010年、4月)、22-67頁、66頁。
- (113) 美代子は、山本泰次郎による以下の全集の編纂作業への協力をしていた(内村美代子、前掲書、115頁)。『内村鑑三信仰著作全集』(全25巻、山本泰次郎編)教文館、1961-66年、『内村鑑三聖書注解全集』(全17巻、山本泰次郎編)教文館、1960-62年、『内村鑑三日記書簡全集』(全8巻、山本泰次郎編)教文館、1964-65年。
- (114) 内村美代子、前掲書、41頁。
- (115) 同書、46頁。
- (116) 筆者は内村と最初の妻竹との破婚が彼の女性観に大きく影響していると見るが、それは別稿で論ずる。
- (117) 「いずれにせよ、主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません」(『新共同訳』)。
- (118) 『全集』26巻、437-8頁。
- (119) 同書、439頁。
- (120) ハウズ、前掲論文、6頁。
- (121) 注20を参照。
- (122) 柴田は、「内村は『独立』や『自由』をより具体的な形で捉えることを行うようになる。そこでは『経済』という言葉がカギになっていた」と、内村の「独立」の特徴を記す(前掲書、90頁)。

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 やたべ・ちかこ)